

# 随想



## 霧の都で

福田 瑞男

アムステルダムを飛び立ち、およそ一時間もたったころ、まぶしいほどに透明なブルーの空から、銀翼は急に鉛色の雲海のなかに入った。と、思うのも束の間、緑が一面に開け郊外らしい大小の区画の中に、赤い屋根と煉瓦(れんが)建ての、どれもこれも同じような家が、点々と目に飛びこんできた。まさしくロンドンの上空であった。夢に描いたアルビ

ヨン(白い国)は、そのようにして、空からのビジターである私を迎えてくれた。時に一九六七年九月六日の昼下がりのこと。

ホテルにてチェックインを済ませ、旅装を解く間もないまま、早々に日程とおりのウインザー城見学へと向かう。バスでテムズ河に沿ってさかのぼること約三十五キロ、巨大な円筒型の塔をもつ城が、小高い丘の上に美しくそびえていた。城は征服王ウィリアム一世(十一世紀)によって築造されたもの。かつての要塞であるとともに、八五〇年間にわたる英王室の八光と影を秘めた居城でもあった。この目で見たイギリスという国の印象は、人間も、歴史も、文化もまるで矛盾に満ちたかたまりのように思えてならなかった。そんな興奮と緊張との中で、まんじりともしない外国での一夜が明けた。

九月七日は亡父の祥月命日である。目覚めとともに、遙か西欧の地から東方に向かって、余恵への感謝をこめての合掌をする。朝食後、ホテルをあとに市内観光へと出かける。そこには私の生涯に一度の奇縁が待ち伏せていることをも知らずに、それは黄色い霧がかけた薄曇りの日であった。観光には欠かせぬ旧跡のひとつ「ロンドン塔」のことだった。バスから降り塔内の博物館まで、テムズ河畔の散策をしていたら、向こうからやってくる日本人観光団の一群とすれ

## 消えていく

宮田 玲子

梅雨の明けた暑い朝、伯母が不帰の人となった。伯父はすでに、敗戦の日を命日として沖繩戦で逝っているから、いま頃は、二人してどこかで語り合っているのかもしれない。

そうだとしたら、お互い何を語り合うのだろうか。伯父は、熾烈で悲惨な戦場の模様を語るだろうか。自分も、敵弾による戦死とも伝えられる死の真相を、まだ壮年期の伯父は、どんな表情で語ることか。氣丈に戦後を生きた伯母の、いろんな表情が想像される。懐しさ、口惜しさ、恥かしさ、そして引き裂かれた時間への怨嗟。もろもろの思い出を塗りこめた三十数年を抱いて、八〇歳の伯母の顔は、黄菊や白百合や、トルコ桔梗の花々に囲まれ、棺の中でやすらひをみえた。

またひとり、いなくなった――。敗戦の夏から冬にかけて、郷里である山鹿に、親戚たちが集り任んだ。外地引揚の私の家族、軍港都市から疎開した叔

父一家、そして、南方と北支の戦線にいるという夫と長男の復員を待つために移り任んだ伯母たち留守家族。戦禍の危険は去ったといっても、食糧難をはじめとして、不安と混乱に満ちたあの時代を、私たちは、迎え入れてくれた親戚を中心に、助け合って暮らしたものだ。

あの頃、一様に疲れた顔をして必死に暮らしをたてていた人たちは、いま、それぞれ暮らしの中にいて、それなりに異なった表情を持っているけれど、その人たちの存在そのものが、あの時代の記憶につながっている。

「こんどは誰の番だろかな、もうちょっと涼しか時にいごたんなア」とひとしきり悲しみの時が過ぎると、陽気で賑やかなことが好きだった故人の話に花が咲き、そんな言葉も聞こえていた。

故人の妹である私の母は、二ヶ月前から入院のため、葬式にこれなかった。お互いに会いたがっていながら会えないままであった。父が逝ってからは、伯母はよく母を誘って湯治に出かけたりしていたが、伯母が二年前に病みついてからは、母が病院に出かけていた。その母も入院する身になった。

祭壇や葬儀場いっばいに溢れる花の中から、私は、父の好んだ桔梗になぞらえて、母へ、トルコ桔梗の花束をつくった。

翌日、母を訪ねる途中、いつものよう

に分田橋の手前で車を止め、鉄橋を見ようと振り返った。無い。川の兩岸に、わずかに名残りの鉄骨を置いて、鉄橋はすっかり姿を消していた。車を進めると、赤錆びたレールらしきものが見える軌道床跡に標識が立っている。昔の駅名を残したのか?と近寄ると、八自転車道用地Vとしてあった。レールの名残りと思ったのは、次の工事に必要な鉄骨だった。

「熊本展望」編集人

## 情報過剰の時代

小松 正

健康上の理由で体重減量の必要を言われ、その一策として「減食」を試みたところが、これが労多割

違った。と、どこかで見覚えのある顔が、ニヤリとはほえんで私に近づき、前方に立ちほだかった。「オオ、福田君じやなかね、どうも歩く格好が――」という。「オオ、やっぱり、ああただったなあ、沢田君、まさかこぎやん所で」と互いに交わす言葉は少なかったが、異国の旅先での思いもよらぬ奇遇に眼も曇りがち。瞬時、故国のこと、肥後熊本への郷愁が脳裡を駆け巡る。ここに熊中(旧制)時代の同期生、英才と鈍才との変哲な握手が、霧の都ロンドン塔のたもとで力強く交わされた。ドラマチックなこんなシーンを家族へのみやげにと、二つのゴシック塔がある、タワーブリッジを背景に、彼の雄姿を私はカメラに収めた。彼もまた8ミリに私の散歩のさまを撮ってくれた。当時、参議院議員であった彼は欧米視察旅行のさ中。私はマドリッドで開催の世界医学総会出席への途次なのであった。

(日奈久ベンクラブ会長・医博)

偶然奇縁、これは行きずりの旅人の感傷に過ぎないのかも知れない。一度だけしか行かなかった国だがロンドンはなつかしい。その懐しさの底には沢田一精君との奇遇の思い出が秘められているからなのであろうか。十年一昔という真夏の夕べのひとときは、こんな思い出に耽りつつ涼しく暮れていく。

私に旧制中学に入学したのは昭和十九年、太平洋戦争ももう末期に近づきつつある頃であった。町の書店にもほとんど書籍らしいものはなかったし、尋小卒の学歴しかない両親の、しかも私が長男であったわが家には、お下がりの辞書すらなく、ほとほと困惑したことを覚えてい

る。父が漸く何処からか入手してきた表紙のちぎれた漢和辞典を伏し拝むようにして、漢文の予習をしたりしたものである。当時、私の住んでいた地域(八代郡坂本村中津道)では、日刊新聞(それも郵送してくるものだった)を取っている家も数えるほどなかったし、ラジオも地域全体に二、三台しかなかったと思う。たまに、その新聞を走り読みさせてもらうとき、たまにそのラジオのニュースを聴く機会に恵まれたときの嬉しさといっ

たらなかった。また、きびしい戦時教育体制下でも、時には「あの旗を撃て」だとか「後に続くを信ず」などの戦意高揚のための映画見学に引率されたが、映画「日本ニュース」は時おくれながら、あのタイトルとテーマ音楽に心踊った記憶は今も忘れられない。

出版物に電波映像その他に、現在は情報氾濫・情報過剰の状態となっている。有り余る情報の供給は、さらに手を変え品を変え、とどまるどころを知らない。これだけ輻輳する情報の流れに洗われていくと、われわれの情報摂取は、大雑把や粗雑の域を通り越して、ともすると摂取機能そのままで摩耗してしまうものらしい。

現実には学校現場で、放課後など校庭にあふれて活動する児童生徒にくらべて、図書室を訪れる生徒の何と少ないことか。読書量の貧困はそのまま、国語読解力・表現力の貧困にはつきりと現われてきている。良書を選んで読むとか辞書をこまめにひくとかの営為を煩雑がる児童生徒の風潮からは、テレビや漫画や安易な読み物などからだけの、情報水ぶくれの肥満体ばかりしか育たないかもしれない。

多忙にかまけてなかなかほんものの読書が出来かねている自らを省みながら、こんなことを考えている私である。

(八代一中教諭・歌人)